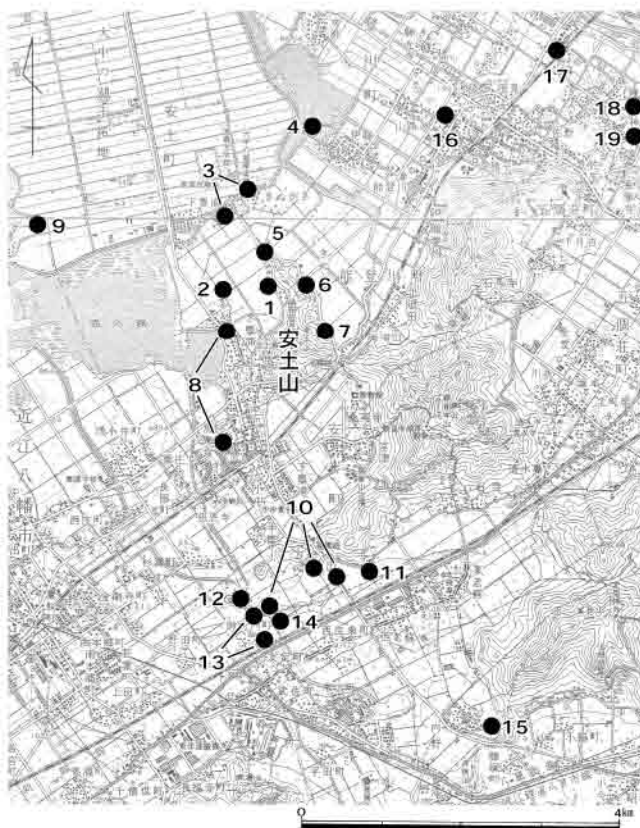


### 326. 琵琶湖内湖岸の縄文時代集落

—安土町竜ヶ崎A遺跡の調査から—

#### 1. はじめに

竜ヶ崎A遺跡は、琵琶湖東岸・東近江地域の、蒲生郡安土町下豊浦に所在し、安土山西麓の旧弁天内湖の東岸に位置します。弁天内湖は、戦中・戦後に行われた干拓工事により、北側の大中の湖や東側の伊庭内湖とともに、陸地にされて現在は水田や畑になっています。今回、県営ほ場整備（経営体育成基盤整備）事業・小中之湖地区が計画されたことに伴い、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会が、平成15年度に980 の発掘調査を行いました。



- 1. 竜ヶ崎A遺跡 2. 弁天島遺跡 3. 大中の湖南遺跡 4. 大中の湖東遺跡 5. 獅子鼻B遺跡
- 6. 城東B遺跡 7. 城東A遺跡 8. 安土城下町遺跡 9. 白王（大中の湖西）遺跡
- 10. 上出A遺跡 11. 上出B遺跡 12. 中屋遺跡 13. 御所内遺跡 14. 常衛遺跡 15. 内野遺跡
- 16. 林・石田遺跡 17. 今安楽寺遺跡 18. 善教寺遺跡 19. 正楽寺遺跡

図1 竜ヶ崎A遺跡および周辺縄文時代遺跡分布図（S=1:100,000）

その結果、当初予想されていた奈良時代の古代寺院に関係する瓦などの発見に加え、縄文時代の集落跡と考えられる遺構・遺物を発見するなど、大きな成果が得られました。その後、整理調査を行い、平成18年3月に発掘調査報告書としてまとめて刊行しました。

ここでは、竜ヶ崎A遺跡周辺における、琵琶湖の内湖の岸辺で営まれた縄文集落についてみていきます。

#### 2. 竜ヶ崎A遺跡と周辺の縄文時代遺跡

滋賀県内で縄文時代の遺物が見つかった遺跡は、現在のところ約400箇所を数えます。東近江地域の琵琶湖岸から内陸の平野にかけては特に多く、県内有数の縄文時代遺跡の密集地といえます。竜ヶ崎A遺跡のある安土町では、北部と南部に集中して分布しています。

北部の遺跡群は、大中の湖や弁天内湖などの湖岸や湖底に点在し（図1・1～9）、その多くは干拓工事で発見されました。安土山と内湖が接する地形は、湖の幸の魚介類と山の幸の木の実・小動物などの多彩な食糧を提供したと考えられます。また、波が穏やかで葎が生い茂る内湖の環境は、丸木舟の停泊地として最良だったと思われます。

この遺跡群は、縄文時代早期後葉～前期後葉（約7,000～5,500年前）に集落が営まれた弁天島遺跡と同中期末～晩期末（約4,500～3,000年前）に集落が営まれた竜ヶ崎A遺跡が中心です。発掘調査で見つかった両遺跡の遺構の標高は82.4～82.9mです。現在の琵琶湖の平均水位が84.371mですから、当時の湖水面は現在よりかなり低かったと思われます。弁天島遺跡では、珧状耳飾8点が発見されたことも注目されます。また、昭和24年に東京大学の山内清男博士らが調査したことで全国的に著名な「安土遺跡」は、約600m隔てて位置する両遺跡の一部だったことが最近わかりました。このほか、大中の湖南遺跡や近江八幡市白王遺跡、東近江市大中の湖東遺跡などの湖底遺跡でも、縄文時代の遺物がたくさん見つかっています。

安土町南部の遺跡群は、湖岸からやや内陸に入った安土町上出から近江八幡市御所内にかけての平野部にあります（図1・10～14）。この遺跡群の中心となる上出A遺跡では、縄文時代前期中葉と同中期末の竪穴住



居（地面を掘り込み上部に覆いを造った家）が何棟も見つかっており、その時期に集落があったと考えられます。また、縄文時代の終わりから弥生時代の始めにかけてのお墓もたくさん見つかっており、その頃は墓地もあったと考えられます。

さらに、安土山を隔てて安土町と隣接する東近江市の旧能登川町では、正楽寺遺跡や今安楽寺遺跡、林・石田遺跡など、滋賀県の縄文時代後期前半を代表する遺跡がたくさん見つかっています（図1・16～19）。正楽寺遺跡からは、竪穴住居などの遺構や、関東地方や西日本各地から運ばれてきた縄文土器が見つかっています。これらのことから、縄文時代後期前半に、この地域では大きな集落が地点を変えながら営まれていたと考えられます。ただ、旧能登川町域ではその前後の時期の遺跡は少ないので、特定の時期にだけ集落が営まれた何かの理由があるのかもしれない。

### 3. 竜ヶ崎A遺跡発掘調査の成果

今回の竜ヶ崎A遺跡の発掘調査では、内湖に向かって沈み込んでいく緩い斜面の上で、縄文時代の遺物をたくさん含んだ3つの地層（遺物包含層）と、その下の地面に掘られた縄文時代中期末の4つの穴（土坑）が見つかりました（写真1）。

遺物包含層の最も下の暗灰色砂層は縄文時代後期までの遺物を含み、そのほとんどは縄文時代中期末と同後期前半のものでした。中央の褐色スクモ（有機質腐植土）層は縄文時代晩期までの遺物を含み、晩期の終わり頃のものが目立ちます。最も上の黒褐色スクモ層は平安時代後期（12世紀）までの遺物を含み、特に奈良時代（7世紀）の土器や瓦が多くあります。以前から安土山周辺では瓦などが採集され、古代寺院「安土廃寺」が推定されていました。これら



写真1 調査中心地全景（北から、奥は安土山）

古代の遺物は、調査地の近くに古代寺院があった有力な証拠となります。

遺物包含層の縄文時代遺物には、縄文土器のほか石器や木製品などがあります。石器では、磨石・石皿といった食料となる木の実をすり潰す道具（礫石器）があります。その材料には手近に採集できる溶結凝灰岩（湖東流紋岩）がよく使われています。石鏃や石匙など、サヌカイトやチャートを用いた、鋭い刃部を持つ道具（剥片石器）は、あまり見つかっていません。近接する弁天島遺跡では、約600点の石鏃や約40点の石匙などが見つかっています。この違いは、主要な食料が時期によって変化している可能性を示しています。

木製品では、舟を漕ぐ道具の櫂が多く見つかっています。一緒に埋まっていた土器から、縄文時代後期頃のものと考えられます。丸木舟そのものは見つかっていませんが、ほかの内湖と同じく、丸木舟が交通手段として弁天内湖でも良く使われていたのでしょう。

### 4. 4つの穴 —縄文時代中期末の貯蔵穴—

4つの土坑（SK1～4）は1～2mの間隔をおいて掘られていました（写真2）。その中で、SK4はもとの形のまま残っていました。ほかの土坑は、干拓で水田を作った時に上が削られ、残りは良くありません。

土坑の上から見た形はほぼ円形で、直径は0.7～0.9mです。深さは0.2～0.6mですが、途中でくびれる「袋状」をしています（写真3）。土坑の中には、縄文土器や石器、ニホンジカなどの獣骨、木片など、壊れた生活道具や食べ滓がたくさん入っていましたので、ゴミ捨て穴（廃棄土坑）と考えられます（写真4）。

この土坑をさらに詳しく調べてみますと、ゴミ捨て穴になる前は、ドングリなどの木の実を貯めておく穴、貯蔵穴だったと考えられます。その理由として、次の4点を挙げることができます。



写真2 土坑検出状況（東から、左よりSK3・SK2・SK1・SK4）



- ①内湖の岸辺に作られていて、常に中を水浸かりにしておけます。西日本ではこのような低湿地によく貯蔵穴を作りますが、これは、乾燥させずに木の実を短い期間保存するのに、適している方法です。
- ②一方、「袋状」の形は、東日本の乾燥した台地上に作られる貯蔵穴によく見られます。西日本の低湿地の貯蔵穴にはあまり見られませんので、東からやって来た人々が掘ったと考えられます。民俗学的な知見では、地下に一定の空間を確保しながら出し入れ口を狭めた袋状土坑は、内部の温度と湿度が一定になるので、食料の保存効果が期待できるそうです。
- ③土坑の中からは、木片や石皿などの人頭大の礫が見つっています。これらは、貯蔵穴の蓋や重石・目印として使われていたものが、貯蔵穴として使われなくなった後に中に放り込まれたと思われます。
- ④土坑の中の土は、貯蔵穴として使われなくなった後、開いたままの出し入れ口から徐々に流れ込んで自然に埋まったように観察されます。したがって、人が埋め戻したお墓などとは考えにくくなります。



写真3 SK1完掘状況（途中でくびれる「袋状」です）



写真4 SK4遺物出土状況（多くの遺物が見つかりました）

縄文時代の「土坑」はこれまでもたくさん見つっていますが、その使われ方はあまりはっきりわかっていません。滋賀県を含む近畿地方で貯蔵穴だとわかった土坑もあまり多くありません。今回見つかった4つの土坑は、低湿地貯蔵穴の良好な事例となります。

また、土坑から見つかった土器には、ただ捨てたのではなく、わざと投げ込んだと思われる、派手な模様が付いたものもありました（写真5）。これは、関東地方の同じ頃の遺跡でよく見られるという、貯蔵穴を使い終わった後に土器や石器・木の枝・焼土・食物の残りカスなどを投げ込むという事例に良く似ています。また、4つの土坑から見つかった土器はどれもほぼ同じ時期に作られたものですので、貯蔵穴が廃絶してから埋まるまでは比較的短い時間だったようです。

## 5. キビ —縄文時代晩期末の栽培植物—

黒褐色スクモ層から出土した縄文時代の終わり頃の土器（深鉢）のひとつに、底の内面に一粒々々が肉眼でも見分けられるおこげが塊で付着していることが、整理調査を進めていく中でわかりました（写真6）。松谷暁子氏（國學院大學非常勤講師：植物考古学）にその正体を調べていただいたところ、走査型電子顕微鏡（SEM）による高倍率の観察の結果、脱穀されなかった穎（えい：実を包む糊のようなもの）が実のひとつに残っていることがわかりました。この穎の表面の細胞の特徴から、キビであることがわかりました。



写真5 土坑SK4出土の東海系縄文土器



キビは、ヒエやアワなどととも雑穀と呼ばれる、イネ科の一年草です（図2）。原産地は中央アジア～アフガニスタン～インド西北部とされます。栄養価が高く、痩せた土地でもよく育つことから、戦後まもなくまでは全国各地で栽培されていました。しかし、その後徐々にその生産量は減り、現在では限られた地域でしか栽培されていません。民話『桃太郎』のキビ団子がよく知られますが、民俗事例ではそのほかにキビ餅やキビ飯などにして食べるということです。最近では小鳥の餌や健康食品としてよく見かけられます。

キビの粒は小さいため、遺跡の発掘調査で見つけることはあまり多くありません。弥生時代前期以前では、これまでに青森県・滋賀県の3遺跡で見つかり、4例目になる竜ヶ崎A遺跡のキビは西日本最古となります（表1）。さらに、これまではいずれも土坑などに埋まった土を水洗選別して数粒が発見されていましたが、今回の例は使われた時期がわかる土器に塊状で付着する、全国初の事例です。

キビに野生種はないことから、栽培種が大陸から日本列島に渡ってきたと考えられていますが、その時期やルートを始め、わかっていないことが少なくありません。しかし、この炭化したキビの発見により、少なくとも、縄文時代の終わり頃の琵琶湖岸では、キビを調理して食べていたことがわかりました。さらに、この付近で栽培していた可能性もあります。当時の日本列島における栽培農耕や食文化を考える上で、非常に重要な発見といえます。



写真6 炭化キビが付着した縄文時代晩期末の土器

## 6. おわりに

今回の竜ヶ崎A遺跡の発掘調査では、弁天内湖の岸辺で営まれた縄文時代の人々の生活について、いろいろなことがわかりました。

竜ヶ崎A遺跡のある小中の湖や大中の湖をはじめ、米原市入江内湖や彦根市松原内湖・近江八幡市水荃内湖などの内湖にある湖底遺跡のほか、大津市粟津湖底遺跡や同石山貝塚などの低湿地遺跡の発掘調査では、陸地では残りにくい木製の道具や骨などが、豊富な水分によりきれいに保存されたまま発見されることが多くあります。そこから、昔から人々が、琵琶湖とともに生活・生業を営むことが多かったことを、調査を通して見ることができます。

今回の竜ヶ崎A遺跡の調査成果が、琵琶湖によって育まれた滋賀県の古代史を、少しでも明らかにできる資料になればと思います。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 小島孝修）

### 〈引用・参考文献〉

- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2001『上出A遺跡・上出B遺跡』
- ・同2002『弁天島遺跡』
- ・同2006『竜ヶ崎A遺跡』
- ・奈良文化財研究所2005「安土遺跡資料 山内清男考古資料15」『奈良文化財研究所史料』第70冊



図2 キビ

遺跡名	所在地	時期
風張遺跡	青森県八戸市	縄文時代後期
八幡遺跡	青森県八戸市	弥生時代前期
稲里遺跡	滋賀県彦根市	弥生時代前期
竜ヶ崎A遺跡	滋賀県安土町	縄文時代晩期

表1 全国キビ出土遺跡一覧